

戦後日本の課外伝播における孔子像の再構築

——『論語物語』と『孔子』を中心として——

潘 呈

はじめに

戦後日本の中学校国語教育における『論語』の伝播形態は、従来、素読やかたる大会⁽¹⁾といった集団的实践に焦点を当てて論じられてきた。しかし、これらと並行して、課外読物を通じた読書伝播も展開されており、国語授業の延長線として読解力の育成や文化的素養の涵養に寄与していた。この点を視野に入れることで、『論語』の受容をより多面的に捉えることが可能となる。

日本社会において『論語』はすでに教科書の範疇を超え、戦後長期にわたり民間出版、通俗的解説、思想的受容といった多様な層を通じて、持続的に「読まれ、読み継がれる」古典としての役割を担ってきた。その日常化・生活化した伝播経路は、「論語読みの論語知らず」や「家持の次に並ぶが論語読み」といった俗諺にも反映されている。

筆者が国立国会図書館データベースを用いて行った予備的統計によると、一九四五年から二〇二四年まで、『論語』を主題とする出版図書は二八〇八種、雑誌新聞は二四七八冊に達している。注目すべきは、その相当部分が単なる原典の重版ではなく、時代的要請に応じた再構築を伴っている点である。これらのテキストは教室用教材ではないものの、形象の構築と価値の伝播において潜在的な教育的機能を果たしてきた。

学界はすでに、戦後日本における『論語』の広範な伝播に注目してきた。子安宣邦(二〇一七・五)は、『論語』を「東アジアにおける人間の最初反省的言語の記録」と位置付けると同時に、繰り返し再読・再解釈される思想テキストでもあると指摘している。さらに彼は「外部読解法」の概念を提示し、読者が『論語』との相互作用を通じて主体的な経験的読解を行い、古典を自己の理解・吸収可能な意義資源に転化させる過程を強調した。この読書方式こそが、『論語』が現代社会において不断に再構築され得る重要なメカニズ

ムである。これに呼応して、宇野哲人（一九四五・十一）もまた、『論語』が孔子の人格と思想の核心を最も端的に体现する典籍であると強調している。この観点からすれば、課外テキストにおける「孔子像」は単なる作者の虚構ではなく、古典との対話過程において生成された文化的産物とみなすことができる。

課外読物と孔子形象というテーマから出発すると、既存研究は大きく二つの方向に分けられる。第一は日中孔子形象の比較研究である。日本学者はしばしば孔子の「凡人化」「生活化」を強調してきた。貝塚茂樹（一九五二）は歴史学的方法により、明治政府が構築した神格化された孔子を解体し、歴史的文脈に位置付けられた孔子を提示した。吉川幸次郎（一九五八）は解読過程に個性化的内省を取り込み、孔子像を描き出した。白川静（二〇〇三）は訓詁「解字」を通じて、孔子が抽象的な道德聖人ではなく具体的に実在的な人物であることを論じた。金谷治（一九八〇）は学術史的観点から日中における孔子形象の変遷を検討し、井上靖（一九八九）は文学的創作において孔子を「一般の人」として描き、個人的体験を通じて『論語』を叙事に融合させた。

これに対して、中国の研究は文献学や美術史に傾斜している。王忠林（二〇一〇・八十八）は孔子造像の伝統を遡り、その形象が時代とともに変遷を重ねてきたことを明らかにした。邢千里（二〇一〇）は孔子像が「神」から「帝王」、さらに「至聖先師」へと展開する過程を体系的に整理した。楊旭（二〇二三）は美術史的比較か

ら、中日孔子像の差異を論じ、とりわけ日本の孔子像が宗教や生活習俗の影響を強く受け、多くが「坐像」として表現されてきたことを指摘している。

第二は、日本文学作品における孔子形象の翻案と教育的伝播に関する研究である。近代以降、『論語』は繰り返し「物語化」されてきたことが明らかとなっている。金培懿（二〇一一）は、この傾向が文学的翻案においてとりわけ顕著であると指摘し、その代表例としてしばしば論じられるのが中島敦『弟子』における孔子と子路の造形である（李俄憲、二〇〇六；趙楊、二〇一四；高潔、二〇二〇）。これに対し、戦後教材に採録され、あるいは課外読物として推奨された下村湖人『論語物語』や井上靖『孔子』は、劉萍（二〇一五）をはじめとする少数の研究に言及されるのみで、体系的な検討はほとんど行われていない。

さらに、「孔子像」の教育的伝播に関する研究は一層乏しい。唐澤富太郎（一九五六）、大橋敦夫（二〇二一）の漢文教材史における断片的な記述、あるいは鈴木駿（二〇二〇）、荻原沙織（二〇二三）による現場教育報告において授業での使用状況が簡潔に触れられるにとどまっている。

以上のように、先行研究は孔子形象の多様性を多方面から明らかにしてきたが、戦後中学校課外読物における孔子像がいかに「外部読解」を通じて再構築され、また教育的伝播体系の中でいかなる機能を果たしたのかについては、依然として体系的検討を欠いている。

この研究空白こそが、本稿が応答しようとする課題である。

本稿はこの問題意識に基づき、戦後中学校教材に採録され、あるいは推薦読物とされた代表的テキスト——下村湖人『論語物語』および井上靖『孔子』——に焦点を当てる。そして、これらの作品が原典の理解と解釈を踏まえつつ、改作と伝播を通じていかに時代的特徴を帯びた孔子像を構築したのか、さらにその国語教育体系における文化的機能を考察することを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。第一部では、戦後日本における中学校向け課外読物と孔子像の文化的背景を考察し、孔子像の多様化を可能にした歴史的・社会的条件を明らかにする。第二部および第三部では、それぞれ下村湖人『論語物語』と井上靖『孔子』における孔子像の構築過程を分析する。第四部では、孔子像の再構築メカニズムを検討し、異文化比較の視点からその特質を明らかにする。最後に結論において、全体の成果を総括するとともに、本稿の意義と今後の課題を提示する。

一、戦後日本中学校の課外読物と

孔子像の文化的背景

(一) 日本文化史における孔子像の構築過程と戦後の転換

日本文化史において、孔子は祭祀・信仰の対象であると同時に、認識され言説化され得る客体としても扱われてきた。その像の形成

は各時代の政治・宗教・思想潮流の影響を強く受け、歴史的展開の中で幾度かの転換を遂げている。

奈良・平安期には、孔子は「先聖」として宮廷祭祀に組み込まれる。『養老令』（七〇一）に大学寮・国学での春秋積奠が規定され、『延喜式』（九〇五）には唐制に倣う斎戒・講経・作詩が明記される。^② 積奠詩は尊孔意識の表現形式となり、菅原道真『菅家文章』には『論語』を治国の規範とみなす記述がある。^③ 中期以降の孔子画像は唐代「司寇像」を模し、政治的知恵・学問権威の象徴として受容された。中世は仏儒習合が進み、『唐鏡』『沙石集』『三国伝記』等は孔子を「儒童菩薩」「光明童子」とし、釈迦・老子と並置した（高陽、二〇一一）。足利学校木造孔子坐像にみられる僧形的造形はその反映である。

江戸期は（１）人格化（林家、瑞応譚の強調）、^⑤（２）去王化（山崎闇斎・荻生徂徠による「無位聖王」論）、^⑥（３）人性化・本土優先（水戸学の神道優位、孔子を「孔丘」と呼称、藩校の祭孔停止）^⑦という三傾向が顕著となる。

近代から戦前にかけて、明治国家は孔子祭祀と『論語』教育を存続させつつ国家主義的道德に組み込み、孔子を忠君愛国の支柱として利用した。

戦後は、一九四七年『教育基本法』が「人格の尊重」「民主的教育」を掲げ、『学習指導要領』も古典と国家主義の結合を断つ（吉田茂樹、二〇一六）。『論語』の教科書収録は縮小し、役割は課外読物・青少年

年文芸へ移行（潘呈、二〇二五）。出版自由化を背景に、温和で生活化した良師像、人間性を重視する思想家像、修身・勵志や異文化理解を志向する像など、多様な再構築が進み、政治権威・階層秩序は相対的に希薄化した。

以上より、奈良・平安から戦後に至る孔子像は、外観・地位・機能の各面で転変を重ねる。中国の孔子像との対照は、その独自性と差異の淵源を明確にする。

（二）中日孔子形象の異同

中国では『論語』『史記』以来、孔子は「温良恭儉讓」の長者像として描かれ、「温にして厲しく、威にして猛からず」と道德的威望が強調される。日本の孔子像は外観・地位・機能で異なる。

外観において、日本の孔子像は「坐像」を主流とし、これは中国で流行した立像や行像と対照的である。足利学校・湯島聖堂・多久孔廟・閑谷学校などに残る孔子像や、狩野探幽・谷文晁・田崎草雲らによる絵画作品はいずれも、孔子を胡坐端坐の姿で造形している。

楊旭（二〇二三）の指摘によれば、「立」から「坐」への改変は、日本宗教文化（坐像中心の祭祀形態）と仏儒習合の伝播構造に由来し、中世坐像の系譜が江戸の画像普及を支えた（邢永鳳、二〇二二）。

地位の面において、中国では漢代以降、「神化―王化―聖化―師化」という多重の称号変遷を経つつ、孔子像は長期にわたり正統かつ権威的な評価を保持してきた。これに対し、日本における孔子像

の称谓は「先聖先師―菩薩―神・無位聖王・孔丘」へと変化し、江戸末期には広く孔子を批判する傾向すら現れた。

上述の差異を形成した根本的要因は、日本における外来文化記号の選択的受容と本土化改造にある。第一に、日本は科挙制度を欠いていたため、儒学が教育や政治において中国ほど安定した核心的地位を占めることはなく、孔子が長期にわたり統治の正当性と結び付けられることもなかった。第二に、神道や仏教といった在来宗教の影響の下で、孔子像は視覚的表現や礼儀において既存の信仰体系との調和を求められた。さらに、日本社会は『論語』を受容する過程で、しばしば取捨選択と再編を行い、それを自国の思想的要請や社会的文脈に適合させてきた。

近代に入ると、日本人における孔子認識は一層多元化した。明治以降、『論語』と孔子像は『教育大旨』などの公式文書に取り入れられ、「仁義忠孝」の道德教化機能を担うとともに、「皇国思想」を補強する手段としても利用された（劉岳兵、二〇〇七：一〇三）。

戦前の軍国主義は孔子学説を動員して侵略戦争を美化し、その文化的意義を改変した。

総体的に見ると、日本社会における『論語』と孔子像への態度は、尊崇から批判へ、神格化から人間化へと転換を遂げた。その背後には教育制度・宗教文化・政治イデオロギーの複合的作用があり、孔子像を次第に中国儒学の固有枠組みから遊離させ、日本独自の特色を帯びさせていった。

(三) 戦後教育方針と出版環境が孔子像の多様化に及ぼした影響

戦後日本の中学校課外読物における孔子像の多様化は、個々の作家だけでなく、教育方針・出版環境・文化思潮の転換が重なって生じた。

第一に、教育方針の変化である。一九四七年の『教育基本法』は「人格の尊重」「民主主義教育」⁸⁾を掲げ、古典は国家主義の道具ではなく、文化理解・言語学習の素材へと再配置された(『学習指導要領』)。その結果、『論語』は「皇国道德」を教え込む手段ではなく、文化遺産として紹介され、孔子は「祖先の生活と精神」を知るための教育資源として読み替えられた。

一九五八年に新設された「道徳的時間」も、重心は「生活における道徳」。読物や視聴覚教材で日常の場面と結びつけ、戦前の階層秩序・犠牲精神の強調から距離を取った(班婷、二〇二四)。これにより、温和で親しみやすい、生活に根ざした孔子像を描く制度的余地が広がり、作者・編者の表現の幅も拡大した。要するに、孔子は忠君愛国の象徴から、人格修養を促す文化資源へと再構築された。

第二に、出版環境の変化である。戦前は国定教科書が主で解釈の幅が狭かったが、戦後は審査の緩和と私出版社の参入(一九五〇年代以降)で題材・形式・読者層が多様化となってきた。⁹⁾この流れは二十一世紀まで続く。

例えば、中小生向けに編まれた『こども論語』や『萌え訳 孔子ちゃんの論語』、さらには漫画形式で展開された『ドラえもん・

初めての論語』や『マンガ論語完全入門』などは、いずれも經典の堅いイメージを崩し、児童・青少年向けに生活化・哲理化を進めた。

第三に、文化思潮の影響である。高度経済成長期は「国際理解教育」への関心を高め、孔子は「東方文化の代表」として普遍的価値と結びついた。例えば、和辻哲郎は昭和十三の著作『孔子』において、孔子をソクラテス・イエス・釈迦と並列させ、「人類の教師」と位置づけた。その評価は戦後の教育・出版界にも少なからぬ影響を及ぼし、以後の教材や一般読物においても「普遍的価値をもつ東洋的師」としての孔子像を支える論拠の一つとなった。また、『NHK100分de名著 孔子・論語』や『英語で論語』といった読物は補助教材として、本国の学生に『論語』を伝える役割を果たすだけでなく、世界に向けて東洋文化を紹介する機能も担った。これにより、孔子像は国家シンボルから異文化交流の教育的アイコンへと広がった。

以上のように、戦後課外読物における孔子像の多様化は、複数の要因が交錯した結果である。第一に、教育方針が国家主義から「人格の尊重」と「民主教育」へと転換したことにより、孔子像の温和化や生活化に制度的条件が与えられた。第二に、出版制度の緩和と市場メカニズムの発展は、多元的な出版体制を形成し、孔子像が多様な体裁や読者層に応じて不断に改編されることを可能にした。第三に、国際理解教育やヒューマニズムの潮流は、孔子を国家政治の象徴から普遍的意義を持つ人格的導師・文化的シンボルへと転化さ

せた。このように、政策・出版産業・思想潮流の相互作用は、戦後日本の中学校課外読物における孔子像の多様な相貌を説明するだけでなく、そのイメージ転換の背後にある深層的な論理をも明らかにしている。

二、下村湖人の書かれた「求道者」

(一) 下村湖人と戦後国語教材

下村湖人(一八八四—一九五五、本名・虎六郎)は佐賀の士族に生まれ、幼時より漢学を修め、『論語』をはじめとする経書に親炙した。『論語』関連の主著は、章句を素材として二十八篇の物語へ翻案した『論語物語』(一九三八)と、全篇を対象とする『現代訳論語』(一九五四)の二作である。両作は戦前・戦中に成立したにもかかわらず、戦後の国語教材体系に広く取り込まれた。一九五〇年代には『私たちの言語』(秀英出版)や『新編新国語』(東京書籍)に「志をいう」「司馬牛の悩み」等が再編収録され、一九六〇〜七〇年代には学校図書・日本書籍・三省堂等の中学校国語で、課外推薦読物として恒常的に掲出された。没後も繰り返し流通・再利用された事実は、教育実践者と作家という下村の二重のアイデンティティが、教材価値を帯びた孔子像の形成に資したことを示す。

(二) 『論語物語』の叙事戦略と「孔子像」

下村の改作には、①素材取捨の広汎性、②物語化と敷衍、③心理化と対比、④言語の現代化、という四点が顕著である。

第一に、素材取捨の広汎性である。下村は名句の蒐集にとどまらず、『論語』二十篇四九章のうち百三十余章を、政治・人倫・修養から逆境の場面に至るまで全篇にわたり採る。治国平天下の言説(「為政」「泰伯」、師弟問答(「学而」「顔淵」、自己回想(「吾十有五にして学に志す」「六十にして耳順ふ」「七十にして心の欲する所に従ひて矩を踰えず」と並び、「陳蔡の厄」「匡の難」「衛の靈公、陳を孔子に問う」等の窮境を周到に織り込むことで、孔子像は一面的教訓から、歴史的・生活的文脈を帯びた立体像へ転じる。

第二に、物語化と敷衍である。語録体の簡潔さを保ちつつ、情景・動作・心理を付して小説的緊張を与える。典型が「陳蔡の厄」で、原典の「陳に在して糧を絶つ。従者病みて、能く興つこと莫し」に對し、下村は飢餓で倒れる弟子、子路・子貢の問い、沈着に應ずる師を描く。子路には「君子はみだれることがない。みだれぬところに、自ずから道があるのだ」と答え、動揺する子貢には「道は永遠である。一歩でも進むことに意味がある」と諭す。締めくくりは「彼らははや疲労を感じない人のようであった」として精神の越境を強調する。さらに『詩経・小雅』「兕にあらず虎にあらず、彼の曠野に率う」¹²⁾を踏まえ、「人は野獣ではない。しかし大道を失えば曠野をさまよう獣に等しい」という再解釈を挿入し、逆境克服の倫理へ

と接続する。末尾では顔回の言葉を借りて「先生の道は至大であります。ゆえに容易に容れられない」と収め、容れられぬがゆえに徳が照り出す構図を定着させる。格言は、緊張と余情を帯びた勸戒の物語へと変換されるのである。

第三に、人物造形の心理化と対比である。問答の骨格を保ちながら、弟子の内面反応を補い、師言の意味を比較対照の中に浮上させる。「志をいう」では、孔子の「老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懐けん」という平易な理想に、子路が「あまりにも平凡」と一瞬たじろぎ、自己の豪語と照らして「不可能ではない」と気づく。他方、顔淵は「無我」に至らぬ己を恥じて赤面する⁽¹³⁾。対照的心理が、平凡のうちの非凡を際立たせる。同様に「泰山に立ちて」では、志学―而立―不惑―知命―耳順―従心所欲の自己史を山頂で語る師を、弟子たちが畏敬と羞恥のあわいで受け止める。ある者は執念に打たれ、ある者は自家の限界を悟る。ここに「師は道を求める者、弟子はその道の証人」という配置が明確化する。

第四に、言語の現代化である。古雅な文語の凝縮を離れ、簡潔・流暢な近代日本語で情景と心理を刻む。「泰山に立ちて」後、孔子は沈着だが確乎たる口調で「わしの道は、そのころから今日まで少しも変わってはいない⁽¹⁴⁾」と語る。口語的直截さが感情と信念を可視化し、經典理解の敷居を下げる。下村の改作は翻訳にとどまらず、文学的言語によって古典と現代社会の交通路を開いた点に意義がある。以上の四戦略は、可読性を高めつつ「求道者」孔子の再構築に

資する。

(三) 孔子像の特質——「非凡な求道者」

以上の叙事を通じて顕在化するのは、神格化された聖賢ではなく、凡俗の境遇において常人を超える堅忍と執念を示す「非凡な求道者」としての孔子像である。第一に、逆境における不動の志である。「陳蔡の厄」における琴と講学、子路への「君子は乱れない」という応答は、『論語』の「君子固より窮す」を文学的に体現する。飢渴・疲労・動揺の諸相が重ねられることで、「窮しても乱れない」姿は観念から経験へと転位する。第二に、「平凡なる理想」の卓越である。「老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懐けん」という日常的人倫は、戦前の忠君・報国に通じる壮語と一線を画す。他方、子路・顔淵の心理対比は、その平凡が「無我」を核とする高みへ反転する契機であることを示す。大道は平明のうちに現れるという反転が、孔子像に独自の光沢を与える。第三に、登山比喩としての求道である。「泰山に立ちて」は、生涯の段階的成熟を「登攀」として語る。山頂に至らぬうちはみだりに高論を弄すべきではないという自戒は、祖述と謙抑、かつ持続的精進を兼ね備えた実践者像を強調する。以上の三点は、「固窮して志を改めず」「平凡にして非凡」「終生登攀」というキーワードに収斂し、文学的改作を通じて教育的感化力を新たにしている。

(四) 教育意図と時代背景

この孔子像は叙事技巧の偶産ではなく、下村の教育的実践・思想的信念・時代の課題に根ざす。下村は東京帝大卒業後、佐賀・鹿島・唐津等で教鞭を執り、一九二五―一九三一年には植民地下台湾で台中中学校校長、台北高等学校首席教師等を歴任した。越境経験は西学東漸のなかで東古典の価値を再考させ、『論語物語』の現実的動機を与えたとみられる。思想面では、彼は「文学と道徳の結合」を一貫して唱え、「教化を持続させ、その勢力を強くせんと欲せば、これに文学的趣味を与えよ。詩的情熱を宿せよ」(下村湖人、一九六五・二二八)と述べる。文学は感情に働きかけ、道徳は規範を与える。両者の結合こそが社会的効力を持続させるという理解である。あわせて、『論語物語』序では「『論語』は明治中期以来、若者への魅力を失った。これは時代の影響である」とし、古典を現代語へ「脱皮」させて再生する必要を説く(下村湖人、一九六五・五)。西洋思想の波及下で伝統が周縁化される局面に対し、文学的叙事によって古典を読者の手に取り戻すという応答であった。ゆえに本作は、教育者・作家としての実践に裏打ちされた企図であり、古典の現代的意义を再構築するものである。

総括すれば、下村は素材の広汎な取捨、物語化と敷衍、心理化と対比、現代語化という戦略により、経文を劇的緊張と情景性を備えた文学的物語へと転換した。その帰結として提示される「非凡な求道者」孔子は、戦後国語教育という公共圏で持続的に機能し、古典

の教化力を更新しえたのである。

三、井上靖の書かれた「永遠の師」

(一) 井上靖と戦後国語教材

井上靖(一九〇七―一九九二)は、新聞小説と歴史小説に卓抜した戦後日本文学の中核的作家である。北海道旭川に生まれ、新聞記者を経て文壇に登場し、受賞歴も多い。なかでも中国文化との関係は深く、敦煌・新疆・甘肅をはじめとする訪中歴を重ね、『敦煌』『楼蘭』『天平の薨』等の中国史題材作品を残した。史伝的叙述の伝統を継承しつつ、歴史と人生への独自の省察を織り込むのがその特質である。晩年の代表作『孔子』は、こうした方法を孔子像の再構成へと向け、歴史を超える精神的価値を付与した作品である。

『孔子』は文学的評価にとどまらず、戦後国語教育にも取り込まれた。たとえば学校図書『中学国語2』(二〇一五)は、第一章「在陳絶糧」を「孔子―覚醒の喜び」と題して抜粋収録し、巻末「読書案内」でも映像化・アニメ化等と並べて井上『孔子』を発展学習用に推奨する。すなわち『論語』の思想は、文学的叙述を媒介として教室に導入され、物語展開・人物描写を通じて学習者に具体的に体感される。本節は、かかる実証を前提に、井上がいかなる叙事戦略により孔子像を造型したかを検討する。

(二) 叙事戦略——弟子の目を通じて

『孔子』は孔子を主題とするが、その叙事は史伝体のように直接的な描写を採らず、「蕩姜」という虚構の人物の口述を媒介として展開される。蕩姜は青年期に孔子に従って諸国を遊説し、老年期に若い学者たちとの集まりで孔子の生涯を回想する——こうして小説の骨格が形づくられている。この「弟子の目から師を再叙する」という叙事戦略によって、作品は歴史的事実と文学的想像のあいだに独自の自由度を獲得している。

小説は全五章からなる。第一章は蕩姜と孔子一行との出会い、第二章は孔子の人格と「天命」を中心に展開し、第三章は弟子たちの群像に焦点を当て、第四章は「鬼神」や「仁・信・智」を論じ、第五章は蕩姜による孔子の総体的評価である。井上靖は簡潔で哲理的な言葉を用い、『論語』の章句と虚構的叙事とを結びつけている。例えば序文において、孔子を「乱世に生まれた古代の学者、思想家、教育家……人類の永遠の師」と総括している。この定位は孔子の歴史的条件を踏まえつつ、その像を、時空を超えた普遍的な精神的支柱として提示している。

(三) 孔子像の特徴——「永遠の師」

井上靖は『孔子』の序文において孔子を「乱世によって生まれた学者、思想家、教育家⁽¹⁵⁾」と総括し、さらに「永遠の師」と呼んでいる。この評価は抽象的な賛辞ではなく、彼が孔子から引き出した二

つの精神的力に基づいている。一つは「天命」への抗いであり、もう一つは人に「生き抜く力」を与えることである。

第一に天命への抗い。楚昭王急死の報は、諸侯遊説十四年の理想を直ちに頓挫させる契機として措定される。蕩姜の回想は、孔子がこの打撃に際して「天をうらみ、人をなじる言葉を一つも発しなかった⁽¹⁶⁾」事実を強調し、ただちに魯に帰って教育に専念する転身の決断を描く。井上はこの沈着を「冷静の極み」と評し、運命的挫折⁽¹⁷⁾に対し、怨嗟ではなく平常と方向転換で応ずる態度を前面化する。

叙事は、天命を受けとめつつも自己の実践を止めないという矛盾の緊張を、場面の推移と語りの抑制によって体現させる。ここで孔子の倫理は、定言命法としての教訓ではなく、危機下の具体的行為形態として示される。

第二に「生き抜く力」。第二章では、蕩姜が「逝く者は斯の如きか、昼夜を舍かず」を師の精神の要諦として再解釈する。遊説を終え魯に帰った蕩姜は、相次ぐ死別に疲弊しつつ、この語によって奮起し「生き抜く力」を得たと語る⁽¹⁸⁾。従来「時間の無情」を歎ずる感慨と読まれがちな章句は、井上において、怠慢を戒め学び働くことを促す能動的箴言へと転位する。朱熹『四書集注』が流水に喩えて「学業の進展に停滞なし」と解する点と接点を持ちつつ、井上の読みは、「注釈学的精緻よりも人生の励ましとしての効能を優先し、現代の読者の生に即して再文脈化する。

かくして「逝者如斯」は、哀感の句から、「怠らず学び、励むべし」

へと読み替えられる。叙事上は、蔦姜個人の心的転換（疲弊―奮起）を媒介に、語の効力が物語内部で検証される点が重要である。孔子の言葉は、人物の内的運動を生む因子として描かれ、読者は弟子の視角を経由してその現在の意味に触れる。

以上二点は、いずれも「師を唯一絶対の聖化像として祀り上げる」のではなく、危機への応答と日々の実践という可視の態度として孔子像を提示する点で一貫する。逆境における平常心と転進の決断、そして時間倫理としての不断の学び――これらは、抽象的聖賢像を、読者の可感的経験へ接続するための叙事的装置である。

（四）井上靖の晩年と教育的意図

井上靖が晩年に『孔子』を執筆した際、その人生背景は青年期とは大きく異なっていた。当時、彼は食道癌に罹患し、五時間に及ぶ高リスク手術に直面していた。回顧とインタビューの中で、彼は「これは生死を天命に託す瞬間だった」と率直に語っている⁽¹⁹⁾。さらに、手術前に親族と別れる心境を「戦場に赴く⁽²⁰⁾」と比喩している。このように生死を直視した経験により、彼は『論語』の「天命を知る」という言葉の意味をより身近に理解するようになった。手術後、彼は「天と現代医学が一体となって、私を救ってくれた」と反省している。これは、個々の有限な生命経験と超越的な秩序を結びつける悟りを示している。言うまでもなく、晩年の井上靖による「天命」に対する思考は、もはや抽象的な哲理ではなく、自身の生命状況と

密接に関連したものとなっていた。

まさにこのような生命的文脈の中で、彼は最後の作品『孔子』を完成させた。小説の中で「天命」という言葉は141回出現し、ほぼ全編を貫いている。冒頭の蔦姜による「天」への問いから、終章の楚昭王急死後に平静に魯へ帰る師の姿まで、人と天命の関係が不断に問われる。作品末尾の「明るく一笑う」という含羞を帯びた締めは、悲壮ではなく静かな肯定で危機を受けとめる姿勢を象徴化するだろう。この主題は、既作にも伏線をもつ。たとえば『化石』では、がん告知後の主人公がセーヌ河畔で「逝者如斯夫、不舍昼夜」を想起し、無常の自覚から生への決意へ反転する（盧茂君、二〇〇八…一三三）。「孔子」は、かかる個人体験の契機を、孔子像の普遍的知恵へと昇華し、個別の疾病経験を超えて共有可能な精神資源へと結晶させる。

教育的位相では、戦後日本の国語教育が重視した「人格の陶冶」「生命教育」と、井上の再解釈は高い親和性を示す。すなわち、「予測不能な天命の前で冷静と堅忍を保ち、有限の生を怠らず学び励む」という規範は、教室で扱うテキストとして、思想史的知識に閉じず、読者の生活実感に結び付く。ゆえに『孔子』の採録は、教材編纂者の教育目標（生活に根差す読書経験の提供）と、作者の晩年の体得との合流として理解できる。井上自身、「老いの身にとって孔子に出会えたことは幸福であった」と述懐する（陳喜儒、二〇二三：二七一）。この回想は、作者個人の心境記録であると同時に、「永

「遠の師」という像が、教室に導入されるべき精神的資源であること
を指し示す。

以上、実証（教材採録）・精読（在陳絶糧／逝者如斯等の具体場面）・背景（晩年の文脈と教育意図）を通じて、井上『孔子』が提示する孔子像の中核は次の三点に要約される。①危機における平常と転進——天命への抗いを怨嗟ではなく実践の継続へ振り替える態度、②「逝者如斯」の能動的再解釈——時間倫理としての不断の学び、③弟子の視角を媒介とする物語化——抽象的命題を可感的経験へと接続する叙事装置、である。これらは「永遠の師」という規定を、時代超越の空疎な称号ではなく、生活世界に効く規範として根拠づける。結果として、井上『孔子』は、戦後日本の課外読物と教材を架橋し、文学創作が教育的伝播に果たしうる役割を具体的に示したのである。次章では、この機制を編者・作者の役割配置の差異から比較し、併せて中国側の孔子像再構築との異文化的相違を検討する。

四、孔子像の再構築メカニズムと異文化間の差異

前章では、下村湖人や井上靖といった作家による改作を取り上げ、戦後日本の中学校課外読物における孔子像の形成過程と教育的意図を考察した。これらの事例から、孔子像が時代や作品ごとに多様に描かれていることが明らかとなった。しかし、この現象をより総合

的に理解するためには、個別作品の分析にとどまらず、再構築の仕組み、異文化比較、教育文化的意義といった観点から整理する必要がある。本章では前章の成果を踏まえ、孔子像の再構築に潜む内在的論理を示すとともに、中国の課外読書形態との比較を通じて、戦後日本における独自の文化的意義を明らかにする。

（一）再構築メカニズム…テキスト改作と教育的文脈の二重構造

下村湖人の『論語物語』や井上靖の『孔子』に見られるように、戦後日本の課外読物における孔子像の再構築は、『論語』原典の単なる再現ではなく、「選択—置換—適応」という意図的な書き換えの過程を経ている

1、原典選別…脱政治化と倫理化の志向。両者は題材を選ぶ際、君臣関係や身分秩序といった政治的・制度的要素を避け、「修身立志」や「人格形成」に関わる内容を重視した。たとえば、下村は「君子は困窮に安んずる」「学問に志し道を守る」といった章句を強調し、井上は「逝者如斯夫（時の流れは絶え間なく過ぎ去る）」「天命を知る」といった表現を繰り返し描いた。こうした選択は、戦後の「民主的教育」の理念に即すると同時に、孔子像を人格教育の理想像へと結び付けている。

2、情景の置換…春秋時代から戦後社会へ。下村は「陳蔡の厄」という簡潔な記録を、弟子たちの苦難や師弟の対話を中心に劇曲化し、孔子を「卓越した求道者」として描いた。井上は架空の弟子・

薦姜の回想という枠組みを用い、孔子の運命との格闘を「生きる力」

への啓示へと転換し、「永遠の師」としての姿を形づくった。いずれも文学的叙述を通して、孔子の言行を戦後日本社会の精神状況に重ね合わせ、古代思想と現代青年のあいだに共感を生み出している。

3、言語の適応…口語化と文学化の両立。下村は現代日本語を駆使して簡潔な経文を生き生きとした物語へと展開し、井上は簡明で哲理的な文体を用いて孔子の生の知恵を強調した。こうした言語の工夫は、経典を訓詁的な「学問の書」から一般読者向けの教育的読物へと開き直す役割を果たした。

以上のように、戦後日本における孔子像の形成は、伝統的な注釈や逐語訳に依拠するのではなく、選択・置換・適応を通して「文学化」と「教育化」の二重の目的を実現し、教材や課外読物の教育的機能を強化していたといえる。

(二) 異文化間の差異…日本と中国の孔子像

異文化的な視点から見ると、日本と中国における孔子像の教育的伝播には明確な差異が認められる。

1、日本の孔子像…温和で親しみやすく、生活に根ざした姿。下村や井上の作品において、孔子は親しみを持てる教師・指導者として描かれ、困難に直面しても「道」を貫き、弟子の心情に寄り添う存在として表されている。こうした文学的・心理的に加工された描写によって、孔子像は青少年の日常的経験に接近し、人格教育に資

する重要な資源となっている。

2、中国の孔子像…经典的・権威的で、原典に忠実な姿。一方、中国の中学校における課外推薦読物は基本的に『論語』原典を中心としており、物語化された改作はほとんど見られない。「聖人」としての孔子像は经典的で権威性が強く、教育の目的は伝統の継承と道徳の規範化に置かれている。²²⁾

3、差異の意義。このように、日本の課外読物における孔子は「教育的適合性」を重視し、読みやすさと人格陶冶を強調するのに対し、中国では「経典の継承」を重視し、儒家伝統の規範的効力を維持しようとしている。この違いは教育制度や価値観の相違に基づくだけでなく、孔子が異文化的伝播の中で多様な姿を取り得ることを示している。

(三) 文化的意義…戦後日本における文化的自己表述

孔子像の再構築は、テキストの改作の産物であると同時に、戦後日本の文化的志向や教育的価値観を反映している。

1、穏やかな受容と再土着化。伝統と現代、西洋と東洋との緊張関係の中で、日本は儒教経典を全面的に排除するのではなく、「文学的再生産」という形で取り込んだ。孔子は戦前の国家主義的・道徳の象徴ではなくなり、人格修養や生命教育を体現する存在として大衆のもとに回帰した。

2、異文化的自己定位。日本の教育的叙事において、孔子は「他

者」であると同時に「自己」として再解釈されている。この二重性は、戦後のグローバル化の背景のもとで、日本が書き換えと再解釈を通して文化的アイデンティティを模索していたことを示している。

3、青少年の価値観形成。課外読物を通じて伝えられる孔子像は、「自己修養」「平等尊重」「人間関係の調和」を強調し、「身分秩序」や「君臣関係の服従」といった要素を後景化させている。こうした価値観は戦後日本の教育理念と合致し、経典が新しい文脈において異なる文化的機能を担うようになったことを示している。

以上、「メカニズム―差異―意義」という三つの層から戦後日本の課外読物における孔子像の再構築過程を整理した。下村湖人は拡張的かつ物語的な叙述によって孔子を「非凡な求道者」として描き、井上靖は文学的・哲学的な筆致によって孔子を「永遠の師」として造形した。両者に共通するのは、原典の選択、情景の置換、言語の適応といった体系的操作を通じて「文学化」と「教育化」を結合させている点である。これに対し、中国の中学校課外読物における孔子像は「経典―権威」の枠組みにとどまり、日本の孔子像のような温和さや生活感覚は乏しい。その差異は、孔子が異文化的文脈の中で多様な解釈の可能性を持つことを示すと同時に、戦後日本が伝統文化を緩やかに受容し、土着的に再編していく文化的論理を映し出している。

むすびに

本稿は、戦後日本の中学校課外読物を対象に、下村湖人『論語物語』と井上靖『孔子』という二つの代表的改作作品を中心に据え、孔子像が教育的伝播においてどのように受容され、再構築されてきたかを考察した。

分析の結果、戦後日本の課外読物における孔子像は明らかに多様化していることが確認できた。下村湖人は、困難にあっても道を貫き、日常の中に大道を見出す「求道者」としての孔子を造形し、井上靖は、時空を超えて生命力を与える「永遠の師」としての孔子像を描き出した。これらの造形は、戦後教育方針が「人格尊重」へと転換し、出版環境が多様化した状況と密接に結びついている。

これらの事例は、課外読物が教材の補完を超え、経典に新たな生命を与え続ける教育的媒体であることを示している。戦後日本における孔子像は、戦前の「国家主義的聖賢」としての政治的象徴から離れ、文学化・人間化を経て、青少年の人格形成や文化理解の資源へと位置づけ直された。中国の課外読物が経典の権威を保持するのに対し、日本の孔子像は生活に根ざし、教育的適合性を強調しており、両者の差異は異文化的再解釈の可能性を浮き彫りにしている。

もともと、本稿で扱った二つの作品に限られており、戦後日本における孔子像の全体像を把握するには不十分である。今後は、他の

改作作品や漫画、映像作品、さらには教育現場での実態調査にまで視野を広げることで、現代東アジア教育における孔子像の動態的変容と文化的意義をより包括的に明らかにできるだろう。

注

- (1) 岡山県では2011年に『論語カルタ』を用いた課外活動が実施され、また栃木県足利市では2021年から2023年にかけて、三年連続で小学生を対象とした「論語カルタ大会」が開催された。
- (2) 原文：「凡春秋二仲月上丁、積奠先聖先師、親王以下群官就大学寮親講經、少納言・弁・外記・史率・史生・左右史生・官掌等、同向檢校、講畢給酒食。」『菅家文章』の作者である菅原道真は、「学問の神」として讃えられている。彼はかつて詩を作り、こう詠んだ。「仲春釋奠、聽講《論語》同賦為政以德、君政萬機此一經、乘龍不忘始收螢。北辰高處無為德、疑是明珠作眾星」。
- (4) 一七八四年に描かれ、現在は早稲田大学中央図書館に所蔵されている『積奠年中行事絵巻』を参照。
- (5) 『庚戌積業記』の記載によれば、林羅山は「中庸」「詩經」および「春秋」の典故を引いて、孔子誕生の際に現れたとされる「麒麟・二龍・五老」の伝説を肯定している。中村習齋『積奠類説』（日本蓬左文庫蔵）。
- (6) 今中寛司・奈良本辰編『荻生徂徠全集』（東京：河出書房、一九七三年）、五八四頁。
- (7) 藤田東湖（一八〇六―一八五五）、水戸藩主徳川斉昭らの見解も参照に値する。福田耕二郎校注『水戸学神道大系 論説編15』（東京：神道大系編纂会、一九八六年）、三九一頁。
- (8) 『教育基本法』（前文）われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。

- (9) 戦後における『論語』関連の課外読物は数多く存在するが、筆者は二〇〇一年から二〇二四年2月までにアマゾンで販売されている青少年向け『論語』読物についてのみ調査を行った。その結果、関連読物は実に一二二種類に及んでいる。詳細については、潘呈『日本中学校における『論語』の教育的伝播に関する研究（一九四五―二〇二四）』蘇州大学博士論文、二〇二五年を参照。
- (10) (14) 引用はいずれも下村湖人『論語物語』（東京：興陽館、二〇二一年）による。
- (15) (18) 引用はいずれも井上靖（著）・鄭民欽（訳）『孔子』（北京：人民日報出版社、1990年）による。
- (19) 手術は五時間以上かかる大きなものになると聞いて、生死のほどは天に任せるほかにないと思った。（中略）最後のところは、これまた天に任せるということになるであろう。
- (20) 「手術で得た天命への理解」平成元年十二月

- 井上靖『井上靖全集』（東京：新潮社、一九九七年）、pp.771-772。
- (20) 「これから戦場に赴く気持ちだよ。助かるかもしれないし、助からないかもしれない。」——浦城幾世「没後30年・井上靖を長女が語る『天命とは……ガン手術後、集中治療室で講義を始めた父』」『婦人公論.jp』[EB.OL]。2021年1月29日公開（2024年11月23日閲覧）、<https://fujin.koron.jp/articles/-3269?page=3>。
- (21) 中国の中学校国語教科書『語文七年級上』には、推薦読物に関して「課後に自主的に『論語』を読み、自分が最も気に入った部分を抜き書きし、その理解を述べる」と記されているが、それ以外に課外読物の推薦は示されていない。
- (22) 参照：拙稿『日本中学校における『論語』の教育的伝播に関する研究（一九四五―二〇二四）』蘇州大学博士論文、二〇二五年。

参考文献 (アルファベット順)

- 班婷「淺析日本道德教育的內容變遷——以「道德的時間」為中心」『台灣教育評論月刊』二〇二四年第十三号、一三六—一八二頁。
- 貝塚茂樹「孔子」岩波書店〈岩波新書〉一九五一年。
- 陳喜儒「聽井上靖談孔子」『南大日本學研究』二〇二三年第2卷0号、二七一—二七二頁。
- 大橋敦夫「『論語』の授業のひと工夫——中学校国語科・漢文教材の發展的学習」『紀要』二〇二二年第45号、一—九頁。
- 高潔「日本近代文學中孔子形象的流變——由小說《麒麟》中的「子見南子」說起」『中國比較文學』二〇二〇年第2号、一四六—一六〇頁。
- 高陽「今昔物語集」及日本中世的孔子故事——禮讚與諷刺之間」『日語學習與研究』二〇一一年第2号、五一—五八頁。
- 萩原沙織「第二學年国語科學習指導案」千葉県立総合教育センター、二〇二三年〔研究報告〕。
- 井上靖「孔子」新潮社、一九八九年。
- 金培懿「『論語』「物語」化——近代日本文化人之讀《論語》法及其省思」『成大中文學報』二〇一一年第35号、一三二—一四五頁。
- 金谷治「人類的知的遺産④孔子」講談社、一九八〇年。
- 今中寛司・奈良本辰編「荻生徂徠全集」東京・河出書房、一九七三年、五八四—五八五頁。
- 子安宣邦「孔子の學問——日本人はいかに「論語」を読んだか」上海・三聯書店、二〇一七年、五頁。
- 劉岳兵「中日近現代思想與儒學」北京・三聯書店、二〇〇七年、一〇三—一〇四頁。
- 劉萍「『論語』與近代日本」北京・中国青年出版社、二〇一五年。
- 李俄憲「日本文學中子路形象的變異與「史記」」『外國文學研究』二〇〇六年第5号、一二一—一二七頁。
- 盧茂君「井上靖の中國題材歴史小説探究」吉林大學博士論文、二〇〇八年、一二三頁。
- 鈴木駿「岩手大學教育學部附屬中学校」二〇二〇年〔研究報告〕。
- 潘呈「『論語』在日本初中教育的傳播研究（一九四五—二〇二四）」蘇州大學博士論文、二〇二五年。
- 唐沢富太郎「教科書の歴史」東京・創文社、一九五六年。
- 鉄凝「猜想井上靖の筆記本」『人民日報』二〇〇七年六月。
- 内田虎六「詩的勢力と道德勢力」『下村湖人全集』第十卷、東京・池田書店、一九六五年、二二八頁。
- 宇野哲人「論語新釈」東京・講談社學術文庫、一九九四年、一一頁。
- 王忠林「孔子造像溯源」『文芸争鳴』二〇一〇年第22号、八八頁。
- 邢千里「中國歷代孔子圖像演變研究」山東大學博士論文、二〇一〇年。
- 邢永鳳・李月珊「孔子在日本」杭州・浙江人民出版社、二〇二一年、三四頁。
- 楊旭「先哲的弱化——日本孔子塑像的本土演變」『美術觀察』二〇二三年第4号、六八—六九頁。
- 吉川幸次郎「中國の知恵——孔子について」新潮社、一九五八年。
- 吉田茂樹「戦後の古典教育を方向づけた時代的要請——中学校學習指導要領と時代的背景との対照を通して」『高知大學教育學部研究報告』二〇一六年、一—一七頁。
- 白川靜「孔子伝」中央公論社、一九七一年。
- 趙揚「太平洋戰爭下の「正義」之歌——中島敦《弟子》論」『外國文學評論』二〇一四年第3号、八六—九七頁。